

日本陸軍航空史（その25） ～比島捷号作戦に伴う航空運用～

1 はじめに¹⁾⁶⁾

6月20日、山口県人でありながら初めて大津島(おおつしま)を訪れました。大津島は周南市徳山港の南西10km、連絡船で約40分の位置にあり、人間魚雷回天に関わる多くの史跡や回天記念館があります。

回天のアイデアはすでに昭和6年、横尾敬義海軍予備役大佐が出していました。その後、甲標的(特殊潜航艇)の艦長教育を受け特攻部隊に属していた黒木博司海軍大尉と仁科関夫海軍中尉が昭和18年12月28日に軍令部と海軍省にこれを提案しますが却下されます⁶⁾。しかし、戦局の悪化に鑑み、昭和19年2月26日に呉海軍工廠で試作開始、4月から量産が開始されました。そして、最初の回天が昭和19年11月8日に、伊36、伊37及び伊47潜水艦の上に4基ずつ搭載され、大津島を出港しました。順にウルシー北泊地、パラオ・コスソル水道、ウルシー南泊地を目標に前進しましたが、伊37は撃沈されました。大津島から15回延べ18隻、山口県の光から12回延べ12隻、同県の平生(ひらお)から2回延べ2隻の潜水艦が出撃しています¹⁾。各潜水艦の回天搭載数は2隻から6隻でした。

陸海軍の特攻については次号から数回にわたり掲載しますので、回天についても触れたいと思いますが、搭乗員の75%は甲種・乙種予科練出身者で、戦死者の平均年齢は21.1歳でした¹⁾。



魚雷点火試験場跡(筆者撮影)



回天運搬用トンネル(筆者撮影。レールが除去され、セメントで埋められた跡が見える)



魚雷発射試験場跡(筆者撮影)

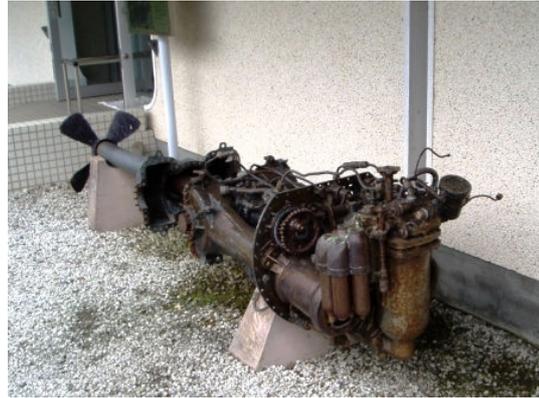


左写真試験場内の魚雷発射口(筆者撮影)

回天は 93 式魚雷の推進部を使用しています。ガソリンを燃焼室に噴霧し高圧酸素を加えて燃焼させ、そこに海水を噴射して高圧の水蒸気を含む混合気を作り、これでピストンを駆動してスクリューを回転させるというもので、航跡がほとんど見えない、非常に優れたシステムでした。

ただし、搭載する潜水艦が 100m の深度まで潜航するので、海軍技術陣は、この水圧に耐えるための改良に苦心したようです。

展示の推進部は終戦時に海中投棄されたものを、防府市野島の漁業者が引き揚げたものです。



回天の推進部(回天記念館にて筆者撮影)

2 捷号作戦計画の概要と航空戦力の状況²⁾⁶⁾

(1) 捷号作戦計画の策定²⁾⁶⁾

昭和 19 年 7 月 7 日にサイパンが陥落し、戦争指導の行き詰まりもあって、東條内閣は 7 月 18 日に総辞職し、東條さんは『依頼免本官並兼官予備役被仰付』ということで退役となり、7 月 22 日、小磯内閣が成立します。

大本営は、本土防衛のためには、いよいよ乾坤一擲の大勝負を行わざるを得ないと考え、1 号(比島)、2 号(連絡圏*域(沖縄、台湾方面))、3 号(本土(北海道を除く))及び 4 号(北海道以北)から成る捷号作戦を策定しました。そのうち特に、捷 1 号及び捷 2 号を重視し、捷 1 号には国力・戦力の 7~8 割を投入することとしました。そして、万が一これに敗れても本土ないし満洲・支那方面で徹底抗戦を行うことを考えました。

*** 日本の戦争態勢は、本土の策源圏、南方資源圏及び両者の連絡圏の三大要域を柱としていました。**

大本営は、「太平洋方面の敵兵力は約 1 万機、約 110 コ師団で、そのうち、10 月ころの対日作戦使用可能戦力は、約 2 千機(予備 2 千機)、正規空母 15 隻、護衛空母 5 隻、地上兵力約 24 コ師団」と見積もりました²⁾。

ただし、米国は、約 80 機搭載の正規空母を平均して約 2 ヶ月に 1 隻、20~30 機搭載の護衛空母(商船や客船を改造したもの)を 1 週間に 1 隻の割合で製造し、護衛空母については、終戦までに、合計 100 隻以上を竣工させました⁶⁾。この国力の差は決定的なものでした。

(2) 陸軍航空戦力の概況²⁾

昭和 19 年 7 月末における陸軍航空戦力の状況を右表に示します。定数には 3 割の予備を含んでおり、戦隊の標準的な定数は、戦闘が 56 機、爆撃・偵察・襲撃が 37 機でした。第 6 飛行師団はニューギニアで飛行機が壊滅し、8 月 31 日付で廃止されました。昭和 19 年 8 月における実働機数は、陸軍約 1,800 機、海軍約 1,000 機でした。

昭和 19 年 7 月末における陸軍航空戦力の概況²⁾

方面(部隊)	定数 A(機)	保管機 数	出動可能 機数 B	B/A 比率 (%)
南西(3 航軍)	543	414	213	39.23
豪北(6・7 飛師)	259	153	62	23.94
比島(4 航軍)	654	480	293	44.80
支那(5 航軍)	407	275	196	48.16
満洲(2 航軍)	48	55	43	89.58
台湾(8 飛師)	232	188	147	63.36
内地(1 航軍)	1,130	824	573	50.71
北東(1 飛師)	230	197	142	61.74
合計	3,503	2,586	1,669	47.64

(3) 捷号作戦時の航空戦力配備²⁾

大本営は、海洋正面作戦については陸軍航空部隊を海軍指揮官、本土防空作戦については、海軍航空部隊を陸軍指揮官の、それぞれ指揮下に入れるよう努めました。そして7月22日、北東方面の第1飛行師団が第12航空艦隊、台湾方面の第8飛行師団と第7・第98戦隊(それぞれ4式重の雷撃部隊)が第2航空艦隊の指揮下に入りました。

昭和19年8月末の捷号作戦における航空戦力の配備予想を右表に示します²⁾。ただし、表は未完成となっています。

昭和19年8月末における陸海軍航空機配備予想²⁾

(単位:機)

区分	陸軍	海軍	合計
北東方面	140	200	340
本土方面	800	150	950
連絡圏域	140	250	390
比島方面	370	200	570
南西方面	約110	若干	
支那方面	約190		
満洲方面	50		

大本営陸軍部は、捷号作戦発動の場合、1号で1,720機、2号で1,406機、3号で1,900機、4号で820機を集中するよう考えました²⁾。

陸軍飛行部隊は、大本営の捷号作戦計画に基づき、右表のように展開していましたが、このうち、六十数コ中隊は新設されたばかりであり、作戦可能中隊は約200コ中隊(第一線定数約2千機で戦闘機中隊が50%以上)でした。

展開中の陸軍飛行中隊数(昭和19年8月)²⁾

分科	本土・台湾	満洲	支那	比島	南西	合計
戦闘	70	5	18	18	23	134
襲撃	6	1	3	12		22
双軽	3		6	6	3	18
重爆	15	1	3	10	3	32
司偵	7	2	2	5	4	20
軍偵	3		1	3	1	8
直協	2	1	2		2	7
空挺	9					9
輸送	3			6	2	11
合計	118	10	35	60	38	261

7月20日、参謀総長は戦局即応の訓練指示を出しますが、これは、海軍部隊と協同して敵渡洋進攻部隊を洋上又は水際において撃滅することを目的としていました。

訓練対象部隊は、本土にある第1航空軍隷下の第12飛行団(第1・第11・第22戦隊:4式戦)、第16飛行団(第51・第52戦隊:4式戦)、飛行第10戦隊(司偵)、飛行第60戦隊(重爆)及び教導飛行師団であり、すでに陸軍中央部は航空特攻の実施を検討していました。

「はじめに」で述べたように、海軍はすでに昭和6年に特攻兵器を考え、昭和16年の真珠湾攻撃においても、特殊潜航艇(一応生還を前提にしながらか大戦中、生還実績なし)が5隻参加しています。また、航空特攻については、昭和18年に城英一郎海軍大佐が提案をしています。

3 非常事態対応のための航空軍備²⁾⁴⁾

(1) 航空官衙及び学校の部隊化²⁾

絶対国防圏の一角が崩れた昭和19年6月20日、陸軍中央部は、本土決戦を念頭に、各実施学校を教導飛行師団に改変しました。陸軍は、日清・日露戦争当時にも補充教育以外の実施学校を一時閉鎖し、その幹部を第一線の作戦に参加させたことはあったようです。

作戦と教育を両方担任させるのは酷でしたが、すでに戦局はそうせざるを得ない状況に追い込まれていました。下志津(偵察)、明野(戦闘)、常陸(戦闘)、銚田(軽爆・襲撃)、浜松(重爆)及び宇都宮(航法等)の各学校が教導飛行師団になりました。

その状況は次頁表のとおりですが、実働機数は、保有機数1,157機中、64%の742機に過ぎ

ませんでした。表(参考文献 2)は常陸が抜けていますが、常陸は 2 式戦を装備していました。また、8 月 8 日、**教導航空軍司令部**の編成が完結しました。軍司令官は**航空総監の菅原道大**(みちお)中将でした。

また、10 月 13 日、明野の要員が主体となって**第 30 戦闘飛行集団司令部**と**飛行第 200 戦隊**が編成されました。

第 30 戦闘飛行集団には、**第 12 飛行団**(第 1・第 11・第 22 戦隊)、**第 16 飛行団**(第 51・第 52 戦隊)及び**飛行第 200 戦隊**が編合されました。**集団長**は**青木武三**中将で、10 月 16 日以降、逐次レイテに向かいました。

各教導飛行師団は、多くの特攻隊を編成して送り出したために勢力が少なくなり、昭和 20 年 7 月 10 日に一つの**教導飛行師団**にまとめられ、従来の各教導飛行師団は**第 1～第 6 教導飛行隊**に縮小されました。

教導飛行師団保有(実働)機数(昭和 19 年 7 月 10 日調べ)(単位:機)²⁾

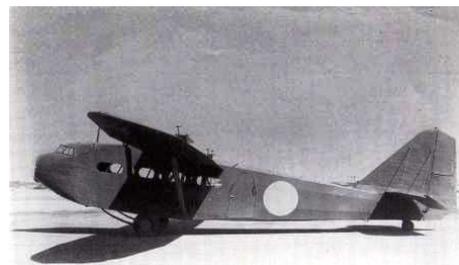
	下志津	明野	銚田	浜松	宇都宮	合計
練習機	57(35)	42(33)	33(20)		44(31)	176(119)
百司偵	61(43)				3(3)	64(46)
98 直	18(16)					18(16)
97 戦	6(5)	211(147)				217(152)
1 式戦		126(74)	8(5)		4(2)	138(81)
2 式戦	6(3)	73(54)				79(57)
2 複戦		3(3)	58(24)			61(27)
3 式戦	18(0)	88(43)				106(43)
4 式戦		31(28)				31(28)
99 双軽			59(32)		3(1)	62(33)
99 襲	40(38)	2(2)	39(27)		5(5)	86(72)
97 重				49(31)	13(8)	62(39)
百重				55(27)		55(27)
1 式輸		2(2)				2(2)
合計	206(140)	578(386)	197(108)	104(58)	72(50)	1,157(742)

(2) 空挺戦力の拡充(滑空部隊の新編)²⁾⁴⁾

独逸空軍が II WW の緒戦で滑空機を使用したのに刺激され、陸軍は**前田航空研究所**に、滑空機の試作を命じました。これが『ク-1』(クはグライダーの「グ」から)でした。ク-1 は昭和 16 年 9 月に初飛行し、翌年『**二式小型輸送滑空機**』として制式化されました。全幅 17.00m、全長 9.36m、全備重量 1,020kg、乗員 1 名、収容兵員 6～8 名という諸元で、約 100 機生産されました⁴⁾。

次いで**日本国際航空工業**は、陸軍の命によりク-8-II を完成させました。これは 619 機も生産されました。そして、昭和 19 年 6 月 8 日、陸軍は初の**滑空輸送中隊**である**第 14・第 15 輸送飛行中隊**を編成しました。各飛行中隊の定数は、曳航機 9 機、滑空機 18 機でした。1 機の曳航機で 2 機の滑空機を曳航するので、両中隊は、9 月ころまでに沖縄、台湾、比島などに作戦資材などの空輸を実施しました。

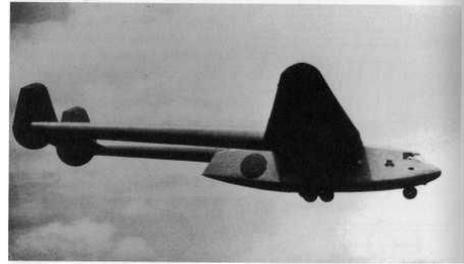
昭和 19 年 11 月には**滑空歩兵第 1・第 2 聯隊**、**第 1 挺進戦車隊**及び**滑空飛行第 1 戦隊**が編成されました。その主要装備は、重爆 1 機、連絡機 1 機、曳航機 18 機(ほかに予備機 6 機)、滑空機 3 機 6(ほかに予備機 12 機)でした。**滑空飛行第 1 戦隊**は『ク-8 II 型』を主要装備としており、曳航機は 97 重でした。同戦隊は 12 月 17 日、空母『**雲龍**』に搭乗して比島に向かいましたが、19 日に台湾付近で撃沈され、すべてを失いました。



日本国際 四式特殊輸送機「ク-8-II」⁴⁾
全幅 23.20m、全長 13.31m、滑空比 15.9:
1、全備重量 3,500kg、搭載量 1,870kg、乗員 2 名、収容兵員 20～24 名。

昭和 17 年 2 月、兵員 32～40 名を輸送できる大型の滑空機の試作が日本国際航空工業(株)に命じられ、『ク-7 型』が昭和 19 年 8 月に完成し、その後 300 機が発注されましたが、これは軽戦車をも輸送可能なものでした。しかし、それを曳航する百式重や四式重が揃えられず、仕方なく発動機付きの『キ 105』に切り替えたものの、わずか 2 機で生産が終了しました。

滑空機による攻撃は、気象の影響を強く受けることと、制空権を失った私の行動半径が制約されることで断念されました。



日本国際 ク-7『真鶴』試作輸送滑空機⁴⁾
全幅 35m、全長 19.92m、全備重量
12,000kg、滑空比 20:1。

4 捷1号航空戦備と航空運用²⁾⁸⁾

(1) 第2・第4飛行師団の比島転用²⁾

陸軍は、在満の第2・第4飛行師団を比島に派遣することとし、派遣にあたり、前者に飛行部隊だけ、後者に地上勤務部隊だけを統一指揮させるという異例の改変を行いました。これは、損耗が甚だしいために、第6・第7飛行師団を合併せざるを得なかったという教訓に基づいています。

(2) 第4航空軍首脳の更迭²⁾⁸⁾

敵の空襲で 100 名の死傷者や 130 機もの損害を出すなど、負け戦で疲れていた第4航空軍司令官・寺本熊市中将と参謀長(森本参謀長は損害を受けたのちに就任しています)を比島作戦前に更迭する命令が昭和 19 年 8 月 30 日に出されました。司令官は富永恭次中将で陸軍次官からの転任ですが、同中将は部隊経験がほとんどなく、それが杉山元(はじめ)陸軍大臣自慢の人事²⁾といえますから、逆に同中将を遠ざけるための人事だったのかと勘ぐりたくなります。

部隊経験の少ない富永司令官を補佐するため、参謀長には航空部隊経験のある寺田清一少将が任命されました。二人は 9 月 8 日にマニラに着任しました²⁾。しかし、戦闘 5 コ戦隊、重爆 2 コ戦隊、軽爆 2 コ戦隊、襲撃 2 コ戦隊、偵察 1 コ戦隊から成り、定数 1,056 機とされている航空軍に、飛べる飛行機は 270 機しかありませんでした⁸⁾。

(3) 台湾沖航空戦の大誤報とレイテ決戦への変更²⁾

昭和 19 年 10 月 10 日、米艦載機延べ 400 機が沖縄に来襲し大きな被害が出たため、基地航空部隊捷 1 号・2 号作戦警戒が発令されました。そして、10 月 12 日、米海軍は、比島攻撃のための陽動作戦として、ハルゼー空母艦隊をして台湾に延べ 1,200 機の攻撃をかけたきました。このため、聯合艦隊は捷 1 号・2 号作戦を発動しました。

第 8 飛行師団は約 70 機で邀撃しましたが半数を失い、見るべき戦果はありませんでした。しかし、海軍第 2 航空艦隊(航空艦隊とはいっても空母はなく、基地航空隊です)は約 100 機で敵機動部隊を攻撃し、大戦果を報じました。13 日にも同様の戦闘が行われ、14 日午後には敵の空襲が終わり、海軍航空は主力で追撃を行いました。

大本営海軍部はその戦果を、「撃沈:空母 11、戦艦 2、その他 4、撃破:空母 8、戦艦 2、その他 18」と報じ、小磯首相は「勝利は今や我が頭上にあり」と絶叫しました⁸⁾。そして、日本国内は提灯行列で沸き立ったのです。しかし実際は「空母 1、巡洋艦 3、駆逐艦 2 の損傷」に過ぎませんでした。曳航されている 1 隻の損傷空母に何機もが攻撃をかけ、あるいは単に波しぶきが上がっただけで撃沈・撃破と報告するなど、戦果が何倍にも積み上げられたのです。陸海軍航空機の損害

は約 350 機でした⁸⁾。

台湾沖航空戦では、**第 2 航空艦隊司令官・有馬正文少将**が搭乗機で敵艦に体当たりを行い、**海軍航空特攻の嚆矢**となりました。批判は控えたいと思いますが、将軍が体当たりを敢行するというのはどういう状況下だったのでしょうか。

過大な戦果報告に対し、ただ一人、**陸軍参謀本部情報参謀・堀榮三少佐**は鹿屋の海軍搭乗員からの聞き取りを通じて「おかしい」と感じ、参謀本部・**有末精三情報部長**あてに打電しますが、作戦課で捷 1 号作戦を担当していた**瀬島少佐**に握りつぶされます(瀬島は昭和 33 年夏に、東京虎ノ門共済会館の地下食堂で堀と一緒に食事をしたのち、堀に謝罪しています(『瀬島龍三 参謀の昭和史』平成 3 年 2 月 保坂正康著 文春文庫))。

堀少佐はその後**第 14 方面軍**(昭和 19 年 7 月 28 日に第 14 軍から昇格)司令部勤務となり、山下司令官に報告しましたが、幕僚は猛反発し、司令官は「そうかもしれない」という態度だったそうです⁷⁾。

あとで海軍も「おかしい」と気がきますが、陸軍には伝えませんでした。かくして大本営陸軍部は、ハルゼー艦隊の残敵を撃破するために、急遽、**ルソン決戦からレイテ決戦へと作戦変更**を行いました。山下司令官は**寺内寿一**(ひさいち)総司令官に反対の意見を述べますが、「元帥は命令する」⁷⁾の一言でやむを得ず引き下がりました。

5 レイテ決戦における航空運用²⁾⁸⁾

(1) 捷 1 号作戦の発動と航空兵力の集中²⁾

昭和 19 年 10 月 18 日、大本営陸軍部は捷 1 号作戦を発令しました。そして、**第 12 飛行団**(司令部・第 22 戦隊:内地、第 1 戦隊:上海、第 11 戦隊:台湾)、**第 25 飛行団**(司令部・第 3 戦隊・第 20 戦隊:台湾、第 14 戦隊:上海)が**比島**に転用され、その到着は 10 月 22 日以降と見積もられました。

しかし、10 月 20 日 1100 ころ、連合軍は猛烈な砲爆撃のもと、レイテ島東岸から上陸を開始してきました。これに対し、敗残部隊が上陸してきたと見ている大本営は、**レイテ航空決戦**開始を、海軍が 10 月 23 日、陸軍が 24 日と決めました。ただし、10 月 23 日における**第 4 航空軍の実働機数は 232 機**で、海軍も同じようなものでした²⁾。

(2) レイテ航空総攻撃²⁾

レイテ航空決戦の前提は、10 月 25 日の水上艦艇によるレイテ湾突入でしたが、同日 1226、第 1 遊撃部隊の栗田艦隊は、敵の船団百余隻が湾内にいて、あと 3 時間足らずで湾口到達のところを突然反転します。数年前のスカパーTV・チャンネル桜『防人の道・今日の自衛隊』における井上和彦キャスターとの対話の中で、元**戦艦大和副砲長・深井俊之助少佐**が述べた内容は衝撃的でした。「北 113 海里に敵機動部隊がいる」という南西方面艦隊からの電報が**栗田健男**(たけお)中将の決心変更理由の一つですが、**大和以外はそれを受信していない**というのです。また、乗り合わせていた**宇垣纏**中将が、「南だ！」と叫んだが、栗田中将は無言で反転したというのです。若い士官も口々に「南だ！」と叫んでいたそうです。偵察機を一機も持っていなかったことについて海軍の常識を疑いますし、これによって栗田艦隊は盲目の状態で行動しましたので、偽電報を誰が起案したのかということ別をすれば、栗田中将の『謎の反転』を批判するのは、少し酷なような気がします。

この日、**関行男**(せきゆきお)海軍大尉率いる**神風**(しんぷう)特別攻撃隊『**敷島隊**』が護衛空母『**キトカン・ベイ**』と『**セント・ロー**』に体当たり攻撃を行い、後者を撃沈しました。これが、特攻機によ

る最初の大戦果でした。また、同日、百機未滿と勢力の少ない**第 1 航空艦隊**は、台湾から来た 196 機の**第 2 航空艦隊**と合わせて**第 1 聯合基地航空隊**となりました。

10 月 26 日、**第 2 飛行師団**は、延べ 168 機をもって、レイテ湾及びレイテ島タクロバン飛行場を攻撃し、「巡洋艦又は駆逐艦 10、輸送船 1 を撃沈、輸送船 17 を炎上撃破、上陸点 10 を炎上、飛行機撃墜・撃破 70 以上」と報じました。10 月 24 日～26 日の**第 4 航空軍**の損害は、自爆・未帰還 80、炎上 36、大中破 28、計 144 機ですが、「レイテ方面の航空総攻撃は一応成功し、今一押しという印象」であった²⁾といえますから、陸軍は、レイテ上陸部隊がほんとうに敗残兵であると思っていました。

(3) 比島方面への航空戦力投入²⁾⁸⁾

航空総攻撃が一段落した 10 月 27 日の**第 4 航空軍**の実働機数は約 200 機でした。そこで大本営は、10 月 30 日、第 2 次転用を前倒しで実施していた**第 38 戦隊**(司偵)に加えて、**第 5 飛行団**(**第 74 戦隊**:重爆、**第 95 戦隊**:重爆)を内地から派遣することを決定しました。

11 月 4 日、南方軍は、一日平均 80 機(現在の 2 倍)の補給を受け、実働 350 機(うち戦闘 200 機)を保持したい旨を上申しました²⁾。当時、一日 80 機前後の消耗を覚悟しなければ思い切った航空作戦は不可能⁸⁾だったようです。

陸軍航空最初の特攻隊『万葉隊』(銚田教導飛行師団で編成)は 10 月 26 日、同『富嶽隊』(浜松教導飛行師団で編成)は 10 月 28 日に比島に到着し、その後も多くの特攻隊が投入されました。

(4) レイテ地上決戦の挫折⁸⁾

レイテ決戦は昭和 20 年 1 月 2 日の小磯首相による「レイテ決戦を、ルソン島を含んだフィリピン全体の決戦に拡大する」という発表で事実上の終焉を迎えましたが、投入された地上兵力約 57,000 名中、先に脱出した 3,000 名余りを除いて、ほとんどが戦死しました。また、海軍は、武蔵を含む戦艦 3、空母 4、巡洋艦 9、駆逐艦 13、潜水艦 5 を一挙に失い、空軍は、約 1,500 機中 836 機(海軍 436 機、陸軍 400 機)を体当たりで失い、500 機以上が撃墜されました。

歩兵第 1 師団第 1 聯隊長・揚田大佐は、マニラでレイテ島の地図を渡されたとき、「縮尺はメートルか？フィートか？」と聞きましたが、第 14 方面軍の幕僚は、「フィートでしょう」と答えました。第 1 聯隊深林行破軍はいつまでたっても目的地に着かず、縮尺が『メートル』であることに気づきました。方面軍はその程度の認識のもとで「勝てる」と思っていたようです。また、島のフィリピン人スパイが日本軍の行動を逐次、無線機で米軍に通知していましたので、なおさら勝てるわけはありませんでした。

台湾沖航空戦の誤報の結果、皇国の興廃を掛けて急遽決定されたレイテ決戦は重大な損害を生じて挫折しました。

6 ルソン島作戦における航空運用²⁾⁸⁾

(1) 第 14 方面軍と第 4 航空軍の対立²⁾

昭和 19 年 12 月 19 日、第 14 方面軍が『ルソン作戦指導要綱』を策定しました。それは、「主力ヲ以テ北部『ルソン』ノ要域ヲ、各一部ヲ以テ『マニラ』東方及『クラーク』西方ノ山地ヲ確保シ各々自活自戦永久抗戦ノ態勢ヲ整へツツ相互索応シテ米軍主力ヲ『ルソン』島ニ牽制拘束シ敵戦力ノ撃擧ヲ企図ス」というものでした。

これに対し、富永第 4 航空軍司令官は、「クラーク、マニラ地区の約 30 飛行場を放棄しては航

空作戦が成り立たない」として、マニラ死守を決意しました。持久に対して決戦を主張したわけです。富永中将は何かと問題を起こす人で、**第7飛行師団長**に無断で同師団飛行部隊を**第2飛行師団**に配属したり、参謀総長命令にある**内地帰還戦力回復部隊**を変更させたり、空中補給を命じた軽爆を師団長が勝手に爆撃に使用したとして**第2飛行師団長**を自分の一存で罷免したりといった具合です。

(2) 富永航空軍司令官の辞意表明²⁾⁸⁾

富永司令官は、11月に南方軍司令部がマニラからサイゴンに後退する際に、南方軍直轄を直訴しますが、幕僚と寺内南方軍総司令官はこれを受け入れず、昭和20年1月1日付で、**第4航空軍**を**第14方面軍司令官**指揮下に入れます。



富永恭次中将⁸⁾

これより先、**第4航空軍**の**第7飛行師団**、**第10独立飛行団**、**第2飛行師団司令部**を**第3航空軍**(昭南)に配属し、第3航空軍から第4航空軍に配属していた部隊を復帰させました。これは、富永司令官にとって実に衝撃的なことでした。失意の富永中将は、昭和19年12月31日、「病気のために第4航空軍の指揮ができないので、更迭されたい」という電報を南方軍総司令官に打ちますが、慰留されます。昭和20年1月3日にも同様の電報を打ちますが、これも拒絶されます²⁾。富永中将には「あくまで、比島において戦い、玉砕するように」ということを示唆したものであったように思えます。

(3) リンガエン湾上陸破碎の特攻²⁾⁶⁾

山下第14方面軍司令官は航空部隊の用法について、「敵の上陸破碎を重視するとともに、縦深にわたる航空作戦を行う」を要望していましたが、富永司令官はまだマニラ死守の姿勢を崩していませんでした。

昭和20年1月4日、我が航空軍は、特攻6機を含む約50機でミンドロ島及びその南方のキューヨー諸島方面の敵艦船を攻撃し、空母1隻を含む艦船6隻の撃沈・炎上を報じ、12機を失いました。次いで翌日の1月5日午後、約640隻の艦船群を認め、リンガエン湾上陸は間違いないと推測され、特攻7機を含む二十数機でこれを攻撃し、相当の戦果を報じましたが、1月6日、この船団はリンガエン湾に入りました。我は、特攻4機、襲撃13機、その他を以てこれを攻撃し、相当の戦果を報じました。

1月7日から8日にかけて敵は静かにしており、海軍は特攻機12機で湾内の艦船を攻撃しました。そして9日、敵は突然リンガエン湾に上陸を開始しました。戦闘飛行集団はほぼ全力で特攻を行い、1月3日～12日の陸海航空軍の戦果は、撃沈艦船98(うち空母8)、撃破艦船23(うち空母1)、計121隻(うち輸送船91隻)と報じられました²⁾。しかし、『第2次大戦米国海軍作戦年誌』によりますと、その間の実際の戦果は、撃沈が2(空母1、駆逐艦1)、撃破が35(空母4、その他31)でした⁶⁾。

(4) ルソン島航空作戦基盤の崩壊²⁾

富永中将は不眠症で病床にありましたが、1月5日、敵大船団がルソン島西方を北上中という情報を得て、「マニラ周辺飛行場をなるべく長く確保し、その後はそれらを破壊して第14方面軍の指揮下に入る」という命令を出しました。しかし、方面軍から、「マニラ周辺で玉砕せず、約300km北のエチアゲまで後退する」よう指示され、あっさりとそれに従います。また、海軍は1月10日、陸軍に断りなく、第1聯合基地航空隊司令部を突如台湾に後退させ、14日までに、操縦者125名を台湾に空中移動させました。

エチアゲに後退した第4航空軍は、1月10日、「台湾に後退して航空活動をするしかない」という結論に達し、1月12日、南方軍に意見具申するとともに、第4航空軍渋谷参謀が台湾に飛んで、第10方面軍及び第8飛行師団に受け入れ協力の要請をしました。参謀長・隈部正美少将は、いずれ許可が下りることと思ひ、衰弱している富永中將を台湾に送ることとしました。電文の乱れがあったのかどうか、「電報で許可が下りたと思った」とのちに述懐する隈部参謀長は1月17日、富永中將を台湾に送り出しましたが、第10方面軍司令官・安藤大將はもちろんそのような命令を受けてはいませんでした。

隈部参謀長は1月21日、サイゴンの南方軍総司令部に行き経緯を報告しました。寺内総司令官は激しく叱責したものの、「事態がこうなった以上はやむを得ない」として台湾使用を認可しました。比島決戦が、実際には持久戦に変質しているのに、大本營はそれを命令として出すことをせず、曖昧な態度を取り続けていました。

(5) 第4航空軍の解消²⁾⁹⁾

1月の連合軍の航空兵力は、レイテ島方面が約400機、ミンドロ島方面が約300機でしたが、1月13日にリングエン湾攻撃を終えた時点の**第4航空軍の兵力はわずか10機**であり、台湾で戦力回復中の飛行機を含めても**約70機**しかありませんでした。また、ネグロス島の**第2飛行師団**(第3航空軍指揮下)は、実働**わずか約10機**でレイテ島及びミンドロ島方面の索敵攻撃を行っていました。

客観的には、台湾に後退して戦力回復を図るのが妥当だと思いますが、無断で第14方面軍の指揮下を離れたのは大問題で、南方軍総参謀長沼田中將は大本營に行き、「富永軍司令官の台湾移動は、南方軍の責任である」ことを述べた上で、第4航空軍の解消を具申しました。この際、「台湾における富永中將の態度が悠々自適である」と非難しました。

そして、**昭和20年2月13日、陸軍中央部は、第4航空軍司令部の復帰(解消)を発令**しました。富永中將については2月23日待命が発令され、5月5日付で予備役に編入されました。ただし、おそらく懲罰的な意図をもって7月に召集され、満洲・敦化(とんか)の第139師団(主力の南方転用後の穴埋め部隊)長に補職されましたが、ソ連の参戦後ハバロフスクに抑留され、昭和30年4月18日に帰国しました。

帰国後に富永元中將が語った内容を要約しますと、「ドラム缶の風呂に入っているところに、参謀長があわてた様子でやってきて、『只今中央から電報が参りました。第4航空軍は直ちに台湾軍司令官に隷属することとなり、揚子江河口付近より台湾を経て比島にわたる一帯の航空作戦を指揮することになりました。つきましては軍司令官閣下は御病気の療養もあり、台湾軍司令官との作戦連絡もありますので、至急台北に飛行していただきたい』と言った。台湾軍司令官に面会に行ったところ、まったく心当たりがない気配を感じた。隈部参謀長に糾すと、自分の電報の読み違えだったという。(中略)要するに統帥者が心身の衰弱せる場合、いかなる状態に陥るか、時として軽率なる書類上の取り扱いに墮したために大事な決心を誤ることがある適例として後世のため戦史に特筆すべきことであろう」ということです⁹⁾。

第4航空軍参謀長・隈部正美少将は、航空本部審査部長に転補されましたが、昭和20年8月16日、壮絶にも一家全員が自決されました⁹⁾ので、真実は不明です。

第4航空軍の空中勤務者と一部の重要技術者700名を比島から台湾へ輸送する試みも行われましたが、艦艇は撃沈され、潜水艦による200名弱の輸送が成功したのみでした。残された約1万名のうちの大部分の将兵は歩兵として比島で散華しました。

捷号作戦における第4航空軍の艦船攻撃戦果は、1,400機による攻撃で、撃沈116隻以上、撃破192隻以上、損害は、体当たり148機、自爆・未帰還194機とされています²⁾。

7 昭和19年から昭和20年にかけて登場した 主要な航空機³⁾⁴⁾⁵⁾

(1) 立川キ106 試作戦闘機(昭和19年)

昭和18年末、アルミニウムの不足が懸念され、単発戦闘機の木製化が検討されました。まず中島キ84(疾風)の木製化のため、立川にキ106として試作が命じられました。キ84の寸法、形状、重量、性能をほぼ同等に保つという困難な要求でした。

昭和19年9月にやっと1号機が完成しましたが、重量は約150kg増加しました。軍の審査では、重量が増加した分性能が低下し、剛性不足もあり、作戦機よりも訓練機として活用すべきだとされましたが、10機試作したところで終戦を迎えました。



キ106 試作戦闘機⁴⁾

全幅:11.24m、全長:9.95m、全備重量:4,150kg、
発動機:中島ハ45空冷星型複列18気筒1,990HP
×1、最大速度:618km/h、航続距離:1,200km、武
装:20mm機関砲×2、12.7mm機関砲×2、乗員:1
名

(2) 三菱キ83 試作遠距離戦闘機(昭和19年)

昭和15年度までは『陸軍航空本部兵器研究方針』により、戦闘機の開発区分は、軽単座、重単座、複座とされていましたが、昭和16年度から近距離、遠距離という区分になり、キ45改の後継として開発が開始されました。

昭和16年5月に出された要求は高度なものでしたが、昭和18年7月にはさらにこれがアップし、常用高度8千~1万m、最大速度は高度1万m付近で800km/h、実用上昇限度は13,000mというものでした。

これを実現するためには過給機付きの2千馬力級発動機が必要でした。キ83試作1号機は昭和19年10月に完成し、昭和20年4月には4号機まで製造されましたが、沖縄戦が始まり、特攻の局面下、遠距離戦闘機の必要性が薄れて開発が打ち切られました。

陸軍の試験では686km/hしか出ませんでした。戦後、米軍がハイオクタン・ガソリンで行った試験では700km/hが出ました。



米軍に押収されたキ83⁴⁾

全幅:15.50m、全長:12.50m、全備重量:
8,795kg、発動機:三菱ハ211ル空冷星型複
列18気筒2,200HP×2、最大速度:
686km/h、航続距離:約2,000km、武装:
30mm機関砲×2、爆弾100kg、乗員:2名

(3) 中島キ87 試作近距離戦闘機(昭和20年)

B-29は排気タービン過給機を有し、1万mの高々度を9tの爆弾を搭載し、570km/hで6,000kmを飛行する能力を持っており、これに太刀打ちできる戦闘機を得るために昭和18年7月、陸軍は、中島にキ87、立川にキ94の試作番号で試作を命じました。

中島は、排気タービン及び過給機共に自信はありませんでしたが、とりあえず自社製『ハ219ル発動機』を搭載することとしました。キャビン与圧が好ましかったのですが、気密を確保

する技術的に乏しく、酸素ポンペを余分に搭載することで対処しました。また、攻撃能力を確保するため、左右翼内に 20mm 砲と 30mm 砲を各 2 門設けました。しかし、排気タービン過給機の故障が頻発し、そのまま終戦を迎えました。

いっぽう、立川キ 94 試作高々度戦闘機は、与圧機能付きで性能向上が期待されましたが、発動機は同じものを搭載しており、多くは望めない状況下、地上滑走を終えた程度で終戦を迎えました。

(4) 川崎五式戦闘機[キ 100](昭和 20 年)

その 21 で書きましたように、川崎の液冷発動機ハ 40 の出力向上型ハ 140 の不調のため、発動機のない三式戦二型改[キ 61-II 改]の機体が並ぶようになりまし

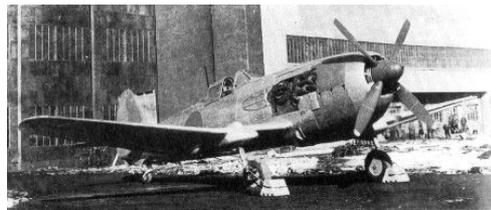
た。液冷発動機は気筒が縦に並ぶために長いクランクシャフトを必要とし、振動を防ぐためには同シャフトの仕上げに高い精度を要求されますが、空冷発動機の場合は、星形に配置されますので、短いクランクシャフトで済みますし、前者ほど高精度は要求されません。

我が国は精密加工機械に対する設備投資に不熱心だったようです。特に、満洲事変以降は、外貨を惜しむあまり、精密で割高な工作機械をごく少数しか輸入せず、あとは熟練工の腕でカバーさせようとした。Me-109 が搭載していた DB 発動機は、1 万分の 1 ミリ単位でしたが、日本の工場では、職人がヤスリで仕上げてもせいぜい百分の 1 ミリまででした³⁾。

空冷発動機でも、無理矢理小さな直径で大馬力を出させるためにシリンダー内のブースト比を高めようとしますと、ピストンリングなどの要求公差は、百分の 1 ミリでは済まなくなりました。このため、試験用に念入りに摺り合わせ仕上げをして製造したものは調子が良かったのですが、量産したものは調子が悪いという結果になりました³⁾。

戦争の勝敗を決したのは発動機の差であったと思います。大馬力の発動機が開発されていれば、B-29 並の大型機も作れたし、防弾板を備えた機体を作ることでもできました。これは一に工作機械の精度の問題に帰一すると思います。液冷発動機の不調のため陸軍は昭和 19 年 10 月 1 日、発動機を空冷式の三菱ハ 112-II (海軍名称『金星』六二型)に換装したキ 100 の試作を川崎に命じました。液冷式の機体に星型空冷式の発動機を付けますと、頭でっかちになって、発動機カウリングと胴体の間に隙間ができますが、土井技師はこれをうまく処理して、集合排気管の出口にしました。

昭和 20 年 2 月に試作 1 号機が完成しました。発動機重量が 330kg も減ったため、最大速度は前面面積の小さい液冷発動機搭載のキ 61-II 改より 30km/h 劣るものの、上昇・空戦・離着陸性



キ 87 試作近距離戦闘機: 計画値⁴⁾

全幅: 13.42m、全長: 11.82m、全備重量: 6,100kg、発動機: 中島ハ 219 ル空冷星型複列 18 気筒 2,450HP × 1、最大速度: 689km/h、航続距離: 600~800km + 戦闘行動 30 分、武装: 30mm 機関砲 × 2、20mm 機関砲 × 2、爆弾 250kg、乗員: 1 名



三式戦二型改の機体を用いた五式戦一型初期生産機



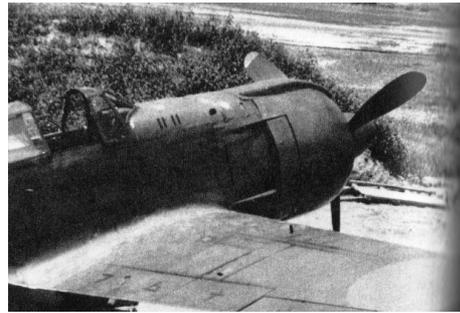
飛行第 5 戦隊の五式戦一型。水漬状風防に変更した新鋭生産機である

五式戦一型⁴⁾

全幅: 13.42m、全長: 11.82m、全備重量: 6,100kg、発動機: 中島ハ 219 ル空冷星型複列 18 気筒 2,450HP × 1、最大速度: 689km/h、航続距離: 600~800km + 戦闘行動 30 分、武装: 30mm 機関砲 × 2、20mm 機関砲 × 2、爆弾 250kg、乗員: 1 名

能の大幅な向上が図られましたので陸軍はこれを『五式戦』として採用し、量産を命じました。

五式戦は『空冷飛燕』と呼ばれ、本土防空部隊の飛行第5・第18・第59・第112・第244戦隊に装備され、グラマン迎撃に大活躍しました。製造機数は390機でした。排気タービン過給機付きのキ100Ⅱ型は試作段階で終戦を迎えました。



五式戦の推力式単排気管⁵⁾

おわり

次回は「航空特攻(1)」

< 参 考 文 献 >

- 1) 回天記念館パンフレット(平成22年4月 周南市回天記念館発行)
- 2) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(3)」(昭和51年5月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 3) 「技術戦としての第二次世界大戦」(平成19年11月1刷兵藤二十八・別宮暖朗著 PHP研究所)
- 4) 「日本軍用機事典 陸軍篇」(平成17年9月 野原 茂著 イカロス出版(株))
- 5) 「日本軍用機写真総集」(昭和45年4月 雑誌「丸」編集部責任編集 (株)光人社)
- 6) 「特攻」(平成19年5月 森山 康平著 太平洋戦争研究会編 (株)河出書房新社)
- 7) 「太平洋戦争の意外なウラ事情」(平成19年6月3刷 太平洋戦争研究会著 PHP研究所)
- 8) 「帝國陸軍の最後 死闘編」(昭和44年5月10刷 伊藤 正徳著 (株)文藝春秋)
- 9) 「戦史関係論文集 No.3」(航空自衛隊幹部学校)